

全海運所属組合の横顔

連載 第12回

九州地方海運組合連合会

その6 津久見地区海運組合

【組合の概要】

事務局 〒 879-2442

大分県津久見市港町 8 番 6 号

電話 0972-82-3484 FAX 0972-82-3484

JR 津久見駅より 830 m、徒歩 8 分

理事長 西瀧 常博 西瀧海運株式会社代表取締役社長

事務局員 高崎 智恵美

組合員数 (平成 30 年 3 月 31 日現在)

運送事業者 5 社

貸渡事業者 4 社

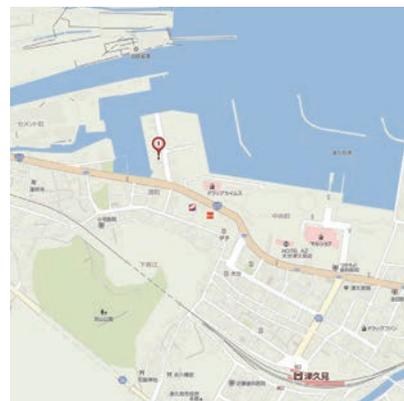
利用運送事業者 2 社

合 計 11 社

所属船腹量 20 隻 46,414 総トン 55,645 重量トン



西瀧理事長



組合所在地 (Google マップ)

【組合の組織】

津久見地区海運組合の役員は理事長 1 名と副理事長 2 名、理事 4 名、監事 2 名、相談役 2 名の計 11 名で構成されている。理事長は西瀧常博（西瀧海運代表取締役社長）が務める。地元の石灰石輸送オペレーターである。組合の活動は年 1 回の通常総会の他、年 2 回から 3 回程度の理事会が開催されている。

また、同組合役員は津久見港振興協議会の役員も兼ね、国・県・港湾関係及び津久見市と連絡を密にし、港湾設備の完備推進と港湾の環境整備汚濁防止及び物流の調査研究等港湾振興の達成を図っている。

事務局は JR 津久見駅から車で 10 分足らずの津久見港湾会館 1 階にある。正面に九州運輸局大分運輸支局津久見分室、福岡入国管理事務所、大分海上保安部や大分税関支所のある津久見港湾合同庁舎が建っている。

事務局は高崎智恵美さんが 1 人で切り盛りしている。



津久見地区海運組合の入居するビル(上)と事務局

組合員の結束の強さが特徴

【津久見地区の海運】

津久見の海運業は、戦前から地域貿易の石灰石を中心に発展してきた。石灰石、セメント、珪石などを運び石炭、コークス、石膏などが復荷だった。津久見は戦前から東九州の船どころで、昭和12年(1937)に50ト～250ト積みの地元機帆船約90隻が津久見船舶同業組合を設立。運賃の維持、船員の確保、組合員の相互扶助の3目標のもとに活発に活動した。昭和15年(1940)には、戦時統制令による大分地区機帆船組合を設立したが、他地区より早く軍から徴用され、一次徴用として100ト以上の機帆船12隻が上海方面に就航。戦局の拡大とともに徴用が増え、終戦直前には殆どがその対象となり、戦後戻ってきたのは3割程度だった。

戦後の地元海運業者の復興は昭和25～26年(1950～1951)と他地区よりも早く、船舶は100隻を数え、地元から出る石灰石、セメントの他、九州炭を阪神地区や日本鉱業佐賀関製煉所向けの輸送にも従事した。津久見地区海運組合が設立されたのは昭和38年(1963)4月で、主な事業内容は優良船員、優良従業員の表彰、船員の安全衛生の教育指導、燃料油価格の安定と数量の確保などと、地元産業の大部分を占める石灰石業者との緊密な関係保持だった。

津久見港は大分県津久見市にあり、大分県が管理する重要港湾である。瀬戸内海への入口にあたる豊後水道に面する津久見湾西側の奥部に位置する港で、津久見市西部の水晶山で採掘される石灰石及び市内で生産されるセメント製品の積み出しによって工業港として発展した。津久見港からの石灰石の移出は、日本全国の港湾移出量の4割を占め、セメントの輸出は日本の総輸出量の4割にあたるほどの規模である。

津久見市の産業を支える石灰石は、かつて推定埋蔵量45億トで無尽蔵といわれ、水晶山から胡麻柄山、碁磐ヶ岳(八戸高原)を経て臼杵市野津町の風連鍾乳洞にいたる約20kmの石灰層をなしていた。現在では、採掘の終わった水晶山の広い跡地に東九州自動車道津久見インターチェンジが開通して市の新しい玄関口となり、ここから東にセメント工場、西に石灰石採掘場(胡麻柄山など)が広がっている。また、津久見市の産業を発展させた石灰石は、既に明治時代から機帆船により豊後水道を利用して、移出されていたが、水深の深い海岸が津久見港の工業を伸ばす原動力でもあった。

津久見港は、天然の防波堤ともいふべきリアス式海岸線により護られ、風波の影響が極めて少なく、東は豊後水道を経て愛媛県南西部海岸の佐多岬より宇和島港に至る海岸線に相対して地形、水深に恵まれた天然の良港として、往時より繁栄してきた。また、外貿航路についても、太平洋の出口に位置していることから、内外国航路として至便な位置にある。

また、津久見港の北部は臼杵湾と津久見湾を分離する突出海岸線の半島となり、西部は取扱貨物の大半を占める石灰石資源の供給地となっている。

津久見港の歴史は、遠く江戸時代の石灰焼きに始まり、



津久見港湾合同庁舎



津久見港

明治後期に我が国にセメント工業、製鉄工業、ソーダ工業などが開発されると石灰石需要が急増し、これとともに港湾は著しく伸張してきた。大正5年(1916)、国鉄日豊本線開通後、豊富な石灰石供給源を背景とした良港であることから、セメント企業が進出した。その後、昭和3年(1928)に税関の設置、昭和9年(1934)に内務省指定港湾編入とともに、津久見港港湾施設の整備が必要との声が高まり、修築工事の検討が開始された。これに伴い昭和13年(1938)に計画立案後、昭和15年(1940)から修築工事に取りかかった。また、昭和13年(1938)に小野田セメント(現太平洋セメント)津久見工場が設立されたことにより、津久見港は石灰石だけでなく、その製品のセメント積出港として、名実ともに発展の端を開いた。



津久見の石灰石鉱山 (写真提供: Photo Library)

戦後は昭和23年(1948)、運輸省(現国土交通省)によって大分県唯一の産業整備港として整備が進められ、昭和25年(1950)には水深9m岸壁1バースが完成し、1万トンの船舶の接岸も可能となった。この間、昭和24年(1949)9月には東九州唯一の開港に指定され、ヨーロッパ各国及び東南アジア諸国との交易が盛んとなり、昭和26年(1951)9月には重要港湾指定を受け、翌27年(1952)に指定保税地域の指定を経て、港勢は急速な発展を遂げ現在に至っている。

港湾施設については、その中核的施設が昭和20～30年代に整備されたもので老朽化がみられるため、効率的で快適な港湾空間形成、また震災時における救援物資等の緊急輸送に対処できるよう、大規模地震対策施設として青江地区に水深5.5mの耐震強化岸壁1バースを整備し、港湾再開発と併せて、水深4.5m岸壁1バース、埠頭用地3万㎡も整備した。千怒広浦地区には貨物船の休憩用としての水深5.5m岸壁240mが整備されている。

大分県下には元々、生い立ちが異なる大分地区海運組合(大分市)、佐伯地区海運組合(佐伯市)、蒲江地区海運組合(蒲江町)、香々地地区海運組合(西国東郡香々地町)、津久見地区海運組合(津久見市)の5地区海運組合があった。それが昭和59年(1984)6月の運輸省(現国土交通省)の内航海運業構造改善指針通達により61年(1986)4月、地元には海運支局がある津久見地区を除いた4地区海運組合で合併し、大分県海運組合が発足した。このとき運輸省は、事業者数の適正化を示すとともに、原則として内航海運組合を都道府県以上の単位、最小でも海運支局単位に再編成し、年間の財政規模も最低1,000万円とする方針を打ち出していた。大分県下の5組合ではこの線に沿って検討を重ね、その過程で一本化に難問もあったが、関係者の協力と支援で4地区組合の合併が実現した。その結果、大分県下では地区組合が大分県海運組合と津久見地区海運組合の2組合になった。両組合はその後、必要に応じて協議会を開催して情報交換と意思の疏通を図っている。

大分県の海の守護神

【文化と伝承】

はやすいひめ
早吸日女神社

大分県で宇佐神宮と並んで海上安全の護り神とされるのが大分市佐賀関にある早吸日女神社である。早吸日女神社は、別称“関の権現様”と地元で親しまれている。神社の縁起に

よれば紀元前 667 年、神日本磐余彦尊（後の神武天皇。かむやまといわれひこのみこと）以下、神武天皇が東征の途中で速吸の瀬戸（豊予海峡）はやすいを通りかかった折、急に船が進まなくなった。神武天皇自ら海底をみると、かつて伊弉諾命が海に落としたといわれる御神剣を大鯨が守護しているのがわかった。いざなぎのみことそこで神武天皇は海女の黒砂、真砂の姉妹 2 神に御神剣を大ダコから受け取るように命じ、まず姉の黒砂が潜ったが、潮の流れが速い上、体力の限界を超えた深さまで潜ったので、御神剣を大鯨から受け取ったまま息絶えた。次に真砂が潜り、御神剣を姉から取り上げ、神武天皇に手渡し息絶えた。その夜、天皇の夢の中に姉妹が現れ、「ここを航海する船は、私達がお護りいたします」と告げたとされている。

この御神剣が早吸日女神社の御神体となつたとされ、今日も姉妹は境内社の若御子社に祀られている。さらに由緒では、御神剣を神武天皇にお渡しした翌朝、激しい雷雨で大岩が裂け、2つの岩となつたのが付近の佐賀関半島ビジャゴ浦に浮かぶ姉妹岩で、黒砂・真砂の 2 神が海の安全を護っているといわれている。現在は姉妹岩が注連縄で結ばれ、その間から昇る朝日が絶景スポットにもなっている。

長い間神剣を守護していた鯨は、神社の眷族（血族、一族）とされており、仕える神職は一切鯨を口にしない。参拝者が心願成就を書き入れた絵馬に替わる「鯨絶ち祈願」の鯨の絵を拜殿に奉納しているのがみられる。

早吸日女神社が現在の地に遷座されたのは大宝元年（701）で、延長 5 年（927）に朝廷が延喜式（律令の集大成）えんぎしきを制定するに当り、式内社（延喜式の神名帳に記載された 2,861 の神社のひとつ）しきないしゃに列せられ爾来、諸災消除、厄除開運の神として皇室を始め諸大名の崇敬厚く、遠近の諸人も伊勢神宮になぞえられて“関大神宮”とも称した。そして、伊勢神宮に参詣することを「参宮」、早吸日女神社に参詣することを「半参宮」とし、多くの信仰をあつめた。

早吸日女神社は慶長 5 年（1600）に、九州にも及んだ関ヶ原の戦いの戦火によって社殿を焼失したが、熊本藩の所領となつて慶長 7 年（1602）、加藤清正により再建された。元禄 10 年（1697）に熊本藩主細川氏により造営された総門を始め、宝暦 13 年（1763）に再建された三間社流造、さんけんしゃながれづくり 桧皮葺の神社建築本殿は社家（小野家住宅）とともに大分県指定有形文化財、石鳥居と神楽殿が大分市指定有形文化財になっている。また、拜殿には多くの絵馬があり、このうち熊本藩船佐賀関入港船絵馬など 3 枚が市指定文化財になっている。拜殿の屋根はこの地方独特の瓦技法を伝える造りで、瓦製の浦島太郎や竜宮城の三重塔などが屋根上にあるのがユニークだが、一説には佐賀関付近に古くから浦島伝説があり、慶長 7 年の拜殿再建以来のものという。また、拜殿正面には信者が寄進した航海安全の石灯籠が一对あるのも目を引いた。



早吸日女神社本殿（左）と海上安全の守護札



ビジャゴ浦の姉妹岩



鯨断祈願の絵



拜殿屋根上の浦島太郎と竜宮城（左上下）と海上安全祈願の石灯籠

あかはちまんしゃ
赤八幡社

津久見地区海運組合の関係者が崇拝するのがJR日豊本線「津久見」駅から徒歩8分の赤八幡社である。その創建は、社伝及び「神社明細帳」などで今から約820年前の建久元年(1190)に石清水八幡宮(京都府八幡市)の分霊を勧請したことに始まるとされている。

天正14年(1586)、豊後の大友家と薩摩の島津家が争った大友義鎮(宗麟)の乱(豊薩合戦)の兵火により社殿は焼失したが、慶長6年(1601)に再建され、同10年(1605)に佐伯藩主毛利高政によって社殿が築造された。現在の社殿は、安政3年(1856)に造営され、昭和16年(1941)に県社となった。

楼門は、大正5年(1916)に建てられ、築100年を越えた。楼門は全体に彩色がなく、木のぬくもりが伝わる木肌色となっている。宮大工の技によるもので幅8.54m、奥行き4.27m、高さ約12.5mを誇り、津久見市内最大の歴史的建造物である。



赤八幡社の本殿(上)と楼門

取材こぼれ話

津久見の石灰石

東九州自動車道の津久見インターチェンジは採掘で消えた胡麻柄山と水晶山の跡地である。胡麻柄山は石灰岩の露出がゴマの茎の模様のようなこと、水晶山は石灰岩洞窟の石が水晶のようなことから名付けられたというが、ともに採掘が進んでかつての面影はない。胡麻柄山は市民から“津久見富士”と称され、水晶山は豊後水道を東征した神武天皇が立ち寄り、ミカンを献上されたとの伝説から“皇登山”とも呼ばれた。

石灰岩はおよそ3億年前に有孔虫類、サンゴ礁、石灰藻などの沈殿で生じ、太平洋の中央部、赤道付近の海底で造られ、プレートの移動によってアジア大陸に近づいたとされている。

石灰岩が産物になったのは江戸時代で、文久2年(1862)に臼杵藩が石灰役所を置いたというが、石灰焼きを始めたのはさらに1世紀近く遡る。東九州自動車道の津久見インターから国道217号を少し南に入った小さな児童公園の内側に「石灰焼き発祥の地」と書かれた説明板が建っている。現代の消石灰で、石灰石を高温で焼いた生石灰に水を加えて製造され、土蔵や城郭に白壁を塗るための漆喰や畑の消毒用として使用された。石灰焼成事業は、津久見市の主要な産業のひとつとして、江戸時代の終わり頃から発展した。大正時代にはセメント産業が創業され純度が高い津久見の石灰岩は、本格的な採掘が始められた。

津久見の石灰岩地層は内陸部へと続き、豊後大野市の奥約20kmにまで達し、その山脈の南には狩生、小半、北には鍾乳洞をみせている。そこからさらに九州山地にかけて、内陸部と海岸部を隔てて秩父古生層と呼ばれる石灰岩地層が続く。石灰岩は水に溶けやすく、あちこちに鍾乳洞を開口している。例えば、南側の佐伯市には小半洞、狩生洞などがあり、北側には豊後大野市の稲積水中洞、そして、臼杵市野津町には、“日本一の美しさ”と讃えられ、推定100万年前からの風連鍾乳洞(国の天然記念物)がある。約90年前に地元青年団によって発見されるまで外気に触れなかった閉塞型で風化がない。(中島)



風連鍾乳洞(写真提供: PIXTA)